インド仏教における『法華経』の位置*

ジョナサン・A・シルク
著者・山極伸之　共訳

インドにおける『法華経』について我々が確実に知っていることはいったい何であろうか。この経典が東アジアの仏教、特に中国や日本の天台、および後の日蓮関係の教団において極めて重要な聖典とされたことはいうまでもない。東アジアに比べてそれを示す証拠が少ないとはいえ、別の地域、例えば中世中央アジアにおいても大変重視されたことも間違いない。このように明らかな証拠を有する地域、また時代、それに関わった人々等が示されずに、単に『法華経』が最も大切な経典の一つであるとか、あるいは唯一の絶対的な価値を有する聖典であるとよくいわれている。信者がこれを受け入れられるのは自然なこととしても、しかし、このような主張はどれほどの意味を成しうるだろうか。

現代のほとんどの仏教の入門書は主要な経典を紹介している。そしてたいていの場合、般若経や浄土経典と並んで、大乗仏教の主たるテキストとして『法華経』が挙げられている。明らかな根拠を示さずして資料の重要性を認めることはできないと考える立場から、このような示し方には若干の問題点があるのではないかと主張したい。特定の人物もしくは人々が重要性を認めるからその事物が重要になるのであって、その人物もしくは人々が如何にこれを遇したか、それがいつどこで起こったのかといった歴史的な事実もしくは証拠があるはずだからである。ゆえに、ここでは資料に含まれるいかなる教義が深遠であるのか等の哲学的、教理的な問題を意図しようというのではない。『法華経』が観念的に重要であるかどうかを問うことは別として、誰にとって重要であったのかを考えてみたい。そしてそこから、何によってテキストが重要なものとなったのかを辿っていきたい。何らかの事物がある人にとって重要であると主張しようとする場合に、どのような形でその重要性が明らかにされているのかを考え

るべきであるという点を強調したいのである。ある人が、何らかの重要性を認めていることを示す言動とは何であろうか。その答えの一つは、その人が重要性を見出し、何らかの権威を付与している評価や価値といったものであろう。そして、ある人にとって価値があり、注目に値し、権威を有していると判断させたテキストの重要性を明示しようとする場合、その価値を示す何らかのサインを見つけ出さなければならない。文献の価値についてのそのようなサインとは、人々がその経典に対して敬意を表しているような行為であり、具体的には経典の献身的な書写や、それに啓発されての美術品の創造や、それに関する講義や、経典の引用などであろう。

インド仏教における『法華経』に関していえば、このテキストがインドの仏教者自身にとってどのように重要であったのかを解明していく必要があるだろう。この問いに答えるためには、インドの写本や、他の文献における平行句の調査や、美術品の研究などが行われる必要がある。これらの要素のうちの一つについては比較的簡単に答えることが出来る。つまり、私の知る限り、現在までのところインド大陸内で『法華経』に関わる美術品や碑文はまったく発見されていない。文献的な証拠に関していえば、よく知られているように、古代インドの仏教写本はごくわずかしか現存していないし、そのほとんどがギルギットからもたらされたものである[1]。ギルギット出土の『法華経』写本は少なくとも６部あり、同様にインドで書かれたと思われる中央アジア出土の写本断片も存在する。ここでそれらに関して詳しく述べることは出来ないが、これらの写本に関して興味深いことは、ある写本が装飾的文字で記述されている点であり、そのことは読まれるためのテキストという以上に崇拝物として意図されたものであることを示していると考えられる。紙数の関係でこれ以上写本に関わる証拠に言及することや、『法華経』の影響を受けた可能性のある他のテキスト中の平行句によって惹起される一連の問題などに触れることはやめにして、特にインド仏教の論師たちによって考慮された『法華経』に焦点を当てることにしたい。

その最初の例として、インド撰述と考えられており、内容的に大きな違いが存在しない２種類の漢訳注釈書を取りあげる。この『妙法蓮華經憂波提舎』は世親（天親）の著作といわれているが、それが正しいかどうかは別として、注釈書自体がインドで記述されたものである可能性は高い[2]。ほとんどの経典注釈

書が研究されていないインド仏教の研究全体からいえば、この注釈書が注目されてこなかったことは当然ともいえるが、一方でいろいろな面からかなり詳しく研究されている『法華経』関係のものとして、もっと関心が払われれてもよいのではないか。また、７世紀の中国文献に記述されている真諦の報告によると、龍樹や安慧などの著作も含んで、かつては50種以上ものインドの『法華経』注釈書があったとされるが[3]、現在『妙法蓮華經憂波提舎』以外のインド撰述の注釈は全く存在しない。ただし真諦に帰される報告は、『大智度論』と『入大乗論』の引用文の存在と独立した注釈書が存在することと誤解した結果である可能性もある。

これらすべての資料が注目に値するとはいえ、ここでは、間違いなくインド撰述の文献で、『法華経』梵本（サッダルマ・プンダリーカ）を引用し、あるいはそれに言及しているものがもたらしてくれる他の事例に特に焦点を当てることにする。なぜなら、インドにおける経典の状況に特に注意を払えば、インド仏教の著者たちによる『法華経』への言及は、重大な示唆を与えてくれるからである。勿論、引用された文脈を離れても、それら引用の存在自体が、例えば経典の流布や入手経路などの面で、大変興味深いものとなる。加えて、種々の引用文はテキストの批判的な校訂に際しても有意義なものとなるし、経典の伝播に関する様々な知識を与えてくれるであろう。しかしよく知られているように、インドの大乗仏教文献のほとんどが現在では引用文からしかサンスクリット語の資料を回収できない。そしてインド仏教文献全体に関してもチベット訳か漢訳の文献しか現存していない場合が多いのと同様に、『法華経』に言及している資料についてもサンスクリットは少なく、翻訳文献がほとんどである。これらの翻訳は明らかに資料の批判的な対照研究には不向きであるし、特にチベット訳者や漢訳者でさえも、原文に経典の引用がある際に、既に存在していた翻訳経典の訳を借りている。その結果、そのように翻訳されている論書中の経典引用文は、文献学的な研究には適していない。

私の知る限り、サンスクリット語で『法華経』を引用あるいは言及している文献は今までに３つしか発見されていない。具体的には、アーリヤヴィムクティセーナ（Ārya-Vimuktisena）の『アビサマヤ・アランカーラ・ヴリッティ』（*Abhisamayālaṁkāravṛtti*）、シャーンティデーヴァ（Śāntideva、寂天）の『シクシャー・サムッチャヤ』（*Śikṣāsamuccaya*、大乗集菩薩学論）、そしてハリバドラ

ていたかを明確にするための手がかりとなるかもしれない。本稿では、以下に『シクシャー・サムッチャヤ』の3つの記述の暫定的な校訂テキストを、チベット訳、漢訳と対応させて示すこととした。個々の記述の詳細な分析は紙数の関係で割愛するが、原則的に『シクシャー・サムッチャヤ』のチベット訳と漢訳は、カンジュール（チベット大蔵経）と鳩摩羅什訳の『法華経』に見られる経典の文章を引用したものと考えられる。

これまでにインドを起源とすると比定された文献中に引用あるいは言及された『法華経』のすべてに関して、本稿で詳しく検討を行うことは不可能であるが、以下にそのような引用や言及を含む資料を簡潔に掲げておく。ナーガールジュナ（Nāgārjuna、龍樹）に帰される（恐らくそれは誤りであろうが）『スートラ・サムッチャヤ』、バーヴァヴィヴェーカの『タルカ・ジュヴァーラー』、チャンドラキールティ（Candrakīrti、月称）の『チャトゥフ・シャタカ・ティーカー』（*Catuḥśatakaṭīkā*）、『マドゥヤマカ・アヴァターラ・バーシャ』（*Madhyamakāvatārabhāṣya*）並びにジャヤアーナンダ（Jayānanda）の『マドゥヤマカ・アヴァターラ・ティーカー』（*Madhyamakāvatāraṭīkā*）、カマラシーラの『マドゥヤマカ・アーローカ』、アスヴァバーヴァの『マハーヤーナ・スートラ・アランカーラ・ティーカー』、スティラマティ（Sthiramati）の『スートラ・アランカーラ・ヴリッティ・バーシャ』（*Sūtrālaṁkāravṛttibhāṣya*）、アヴァローキタヴラタ（Avalokitavrata）の『プラジュニャー・プラディーパ・ティーカー』（*Prajñāpradīpaṭīkā*）、ダルマミトラ（Dharmamitra、法友）の『アビサマヤ・アランカーラ・プラジュニャー・パーラミタ・ウパデーシャ・シャーストラ・ティーカー　プラスプタパダ』（*Abhisamayālaṅkāra-prajñāpāramitopadeśa-śāstra-ṭīkā Prasphuṭapada*）、アバヤーカラグプタ（Abhayākaragupta）の『ムニマタ・アランカーラ』（*Munimatālaṁkāra*）、『八千頌般若経』の注釈であるジャガッダラニヴァーシン（Jagaddalanivāsin）の『バガヴァティー・アームナーヤ・アヌサーリニ・ナーマ・ヴャークャーム』（*Bhagavaty-Āmnāyānusāriṇi-nāma-vyākhyāṁ*）、アティシャ（Atiśa）の『マハー・スートラ・サムッチャヤ』（*Mahāsūtrasamuccaya*）があり、これらはすべてチベット訳にのみ現存する。そして、漢訳しか残されていないが、インド原典が存在した可能性の極めて高い『入大乗論』がある。これらの中で、ハリヴァドラの『アビサマヤ・アランカーラ・アーローカ』とアバヤーカラグプタの『ムニマタ・アランカーラ』が、舎利弗が未来にパドマプラバ（華光）と

（Haribhadra）の『アビサマヤ・アランカーラ・アーローカ』（*Abhisamayālaṁkārāloka*、現観荘厳論）である。その中で『アビサマヤ・アランカーラ・ヴリッティ』は特定の言葉には言及していないが、声聞の涅槃に関して『法華経』を拠り所として用いている[4]。

ハリヴァドラは『法華経』に2度言及しているが、内容的には「1つの乗り物があるだけで、第2はない」という有名な『法華経』第2章のフレーズを引用しているだけである[5]。

おそらくはインドにおいても、この概念はかなり重視されていたと思われるが、それほど多くの論書は『法華経』の一乗思想に触れていない。『法華経』と明示されたものとしては『スートラ・サムッチャヤ』（*Sūtrasamuccaya*）[6]、バーヴァヴィヴェーカ（Bhāvaviveka、清弁）の『タルカ・ジュヴァーラー』（*Tarkajvālā*）[7]、カマラシーラ（Kamalaśīla、蓮華戒）の『マドゥヤマカ・アーローカ』（*Madhyamakāloka*）[8]、アスヴァバーヴァ（Asvabhāva、無性）の『マハーヤーナ・スートラ・アランカーラ・ティーカー』（*Mahāyānasūtrālaṁkāraṭīkā*）[9]の中に、『法華経』とは明示されていないものとしては『入大乗論』[10]の中に具体的な例が見出される。

サンスクリット文献として比較的詳しく『法華経』を引用しているのは、シャーンティデーヴァの『シクシャー・サムッチャヤ』だけである。それは、『法華経』の第2章「方便品」および第13章「安楽行品」の偈頌のいくつかの部分と長行の一部分とを含んでいる。今回手に入れることのできた資料によって判断すれば、シャーンティデーヴァによって引用された経典は、ケルンと南条がテキスト校訂の原本にしたネパール写本系統に近く、一般にカシュガル本あるいはギルギット本と呼ばれているものとは隔たりがある。シャーンティデーヴァの場合、経典などを引用する際にやや選択的にそれを行う傾向が広く見られ、『シクシャー・サムッチャヤ』の記述がテキストの批判的研究に対して価値を有することは疑いないとしても、例えば清田寂雲がいったように『シクシャー・サムッチャヤ』に見出されない文章はシャーンティデーヴァが利用できた『法華経』からは実際には失われていた、というような偈頌の途中にある長行の欠文が起こったことを仮説として認めてよいかどうかは簡単には判断できない[11]。他の写本との校合を伴った『シクシャー・サムッチャヤ』の記述の慎重な比較検討は、シャーンティデーヴァがいかなる種類のテキストを実際に持っ

いう仏になるという予言（授記）に言及している点、および『シクシャー・サムッチャヤ』が子供の遊びとして仏塔の構造に関する記述を含んでいる点には留意する必要があろう。一方、放蕩息子の物語に言及している『入大乗論』と、カマラシーラの『マドゥヤマカ・アーローカ』の中にある「火宅」と「涅槃の城」についての引喩を除けば、インドの文献の中には、東アジアでよく知られているこれらの比喩物語の引用あるいは言及さえも見られないのである。最後に、『法華経』は『大智度論』において何度か引用されているが、この論が確実にインド撰述の文献であるかどうかについて問題が残る限り、本研究のような場合には、軽率に資料としてこれを用いることは慎むべきであると思われる。

『法華経』は大乗仏教の根本的な経典の一つであるとよくいわれており、大乗仏教の起源に関する多くの主張が、まさしくこの経典を出発点として展開されている。しかし残念なことに、我々は大乗仏教運動の起源に関して確実な知識を、実際にはほとんど何も有していない。初期の大乗経典の重要性に関して我々が判断できるのは、中国の支婁迦讖のような旧訳時代以降の文献、およびそれよりも後の時代の著者による文献からでしかない。確かに『法華経』には、竺法護による比較的古い時代の翻訳も存在するし、先に示したようにインドの論師たちによっても無視されているわけではない。しかし、後代の論書にとって主要な資料になっているとはいえず、実際に言及されることもまれである。『法華経』以外の他の経典類が引用あるいは言及される状況を比較してみると、例えば般若経典、『迦葉品』、『三昧王経』、『稲竿経』、『如来不思議祕密大乗経』などを引用したり言及したりする例をしばしば目にする。一方、逆の例として、東アジアにおいて非常に有名で広く流布した、いわゆる『大無量寿経』に関しては、それが間違いなくインドに存在していたという確実な証拠を我々は何も有していない。インド撰述といわれ、これも世親の著作と考えられている『大無量寿経』の漢訳注釈書（『無量寿経憂波提舎』）は確かに存在するが、それが本当にインドの文献であるのかどうかは証明されていない。なお、『大無量寿経』は、確実にインド撰述と認められる論書では一度も引用されていない。もちろん、だからといってこの経典がインド以外でつくられたということにはならないが、少なくともインドの論師たちにとって重要な経典でなかったと推測することは可能であると思われる。しかしながら、例えば論師たちによって文献がさほど重視されなかったことが、そのまま文献自体の重要性の欠如を意味するのではないことにも留意しておく必要がある。インドの論師たちによって文献が引用されていないことは、必ずしも彼等がその経典を無視していることを意味するわけではないであろう。なぜなら経典を尊重しながら、引用以外の形でそれを示したことも十分考えられるからである。例えば、仏教論理学の祖といわれるディグナーガ（陳那）によって書かれた書物の中に『大無量寿経』の引用はもちろん名前さえも出てこないことが、ディグナーガ自身その経典を知らなかったとか、崇拝していなかったという結論の根拠にはなりえない。例えば、毎朝その経典の写本に供養をおこなっていたとしても、その痕跡を知ることは我々には不可能である。したがって、ここに扱う論書のような書物だけに出てくる経典が、インド仏教において重要な聖典であると理解することは誤りである。これらの点に十分注意を向けながら、今後さらに総合的な大乗経典の研究を続けていく必要があると考える。

残された紙面を使って、シャーンティ・デーヴァの『シクシャー・サムッチャヤ』に見られる、３種類の『法華経』の引用部分を掲げることにする。各引用文については、次のような資料を挙げる。

１）ケンブリッジ大学所蔵サンスクリット写本 Add. 1478（MS）（セシル・ベンドールによって最初に編纂されたもの）[12] の暫定的なローマ字転写。『法華経』ケルン南条本（KN）との対応関係を示す。なお、写本の読みが正しくない場合でも、写本に見られる読みをそのまま忠実に転写する。各行の最初の文字は太字にした。

２）『シクシャー・サムッチャヤ』のチベット訳（デルゲ版と北京版）の転写、並びに『法華経』のチベット訳との相違点の指摘。原則として『シクシャー・サムッチャヤ』のチベット訳は、カンジュールに残されている『法華経』チベット訳を引用しているが、異なる箇所には下線を引いた（SP）。残念なことに、信頼のおける『法華経』のチベット訳校訂テキストは存在しないため、その厳密性に問題が残されてはいるものの、中村瑞隆のテキストとの対応関係を指摘した[13]。

３）『大乗集菩薩學論』（『シクシャー・サムッチャヤ』の漢訳）と鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』の引用部分。ここでの指摘は『大正大蔵経』のみによる。

なお、ここでその資料を利用することは出来ないが、戸田宏文による『法華経』諸写本の詳細な比較対照研究が存在し、その中にここで掲げた偈頌の最初

の一群が含まれていることを指摘しておく[14]。また、これと同じ偈頌が、アティシャの『スートラ・サムッチャヤ』の中に引用されていることも付記しておく[15]。

I) Bendall (1897-1902) : 47.13-49.4 = MS 29a1-6 = KN 278.10-280.10 = verses VIII. 2-5; 8-9; 11-13:

āryas*addharmapuṇḍarīke* py uktaṁ ||

ācāragocaraṁ rakṣī asaṁsṛṣṭaḥ śucir bhaveṭ |
varjayet saṁstavaṁ nityaṁ rājaputtrebhi rāja(bh)i[ḥ]||] (2)
ye cāpi rājñāṁ puruṣāḥ kuryāt tehi na saṁstavaṁ |
caṇḍālapauṣkakaiḥ śauṇḍais tīrthikaiś cāpi sarvvaśaḥ || (3)
adhimānīn na seveta ' vinaye cāgame sthitāṇ |
arhantasaṁmatāṇ bhikṣūn duḥśīlāṁś caiva varjayeṭ || (4)
bhikṣuṇīm varjayen nityaṁ hāsyasaṁlāpagocarāṁ |
upāsikāñ ca varjeyā prakaṭim[1] anavasthitāṃ || (5)
strīpaṇḍakāś ca ye satvāḥ saṁstavaṁ tair vivarttayeṭ |
kuleṣu cāpi vadhukāḥ kumāryaś ca vivarjayeṭ || (8)
na tāḥ saṁmodayej jātu kauśalyāṁ sādhu pṛcchituṃ |
saṁstavaṁ ca vivarjeyāṭ śaukaraurabhrikaiḥ saha ||(9)
strīpoṣakāś ca ye satvā varjayet tehi saṁstavaṁ |
naṭair jhallakair mallebhir ye cānyet tādṛśā janāḥ || (11)
vāramukhyān na seveta ye cānye bhogavṛttinaḥ |
pratisaṁmodanān tebhiḥ sarvvaśaḥ parivarjayeṭ || (12)
yadā ca dharmaṁ deśeyā mātṛgrāmasya paṇḍito |
na caikaḥ praviśet tatra nāpi hāsya**sthi**to bhaved iti || (13)

1. Reading of ṭi questionable.

I) Derge Tanjur 3939, *dbu ma*, *khi* 32a5-b3; Peking Tanjur 5336, *dbu ma*, *ki* 39a8-b7:

'phags pa dam pa'i chos pad ma[1] *dkar po* las kyang ||

cho ga spyod yul bsrung bya zhing || 'du 'dzi[2] med la gtsang bar bya ||

rgyal po dang ni rgyal pu dang || 'dris[3] byed rtag tu spang par bya || (2)
rgal po'i zhabs 'bring gang yin dang || gdol pa zol ba chang 'tshong dang ||[4]
mu stegs can ni de dag dang || rnam pa kun du 'dris mi bya || (3)
dge slong 'dul dang lus gnas la[5] || dgra bcom snyam du sems byed cing ||
nga rgyal can rnams bsten[6] ni bya || tshul khrims 'chal rnams rnam par spang || (4)
rgod[7] cing smra ba'i spyod yul can || dge slong ma rnams rtag tu spang ||
mi brtan par ni mngon pa yi || dge bsnyen rnams kyang spang bar bya || (5)
bud med ma ning[8] sems can gang || de dang[9] 'dris byed rnam par spang ||
khyim rnams su ni mna' ma dang || gzhon nu ma rnams spang bar bya[10] || (8)
khams dang legs par dri byed pa || de dag nam du'ang dga' mi byed ||[11]
phag 'tshong pa dang shan pa dang || 'dris par byed pa rnam par spang || (9)
de bzhin du sbyar te ||
gang dag bud med gso byed dang || gar mkhan gyad dang sil khrol ba ||
gang gzhan de dang 'dra ba yang[12] || de dag rnams dang 'dris byed spang || (11)
res ma'i gtso mo[13] bsten mi bya || ji snyed longs spyod 'tsho ba gzhan ||
shin tu dga' ba de dag kyang || rnam pa kun du yongs su spang || (12)
mkhas pas[14] bud med rnams la yang || gang gi dus na chos 'chad pa ||
der ni gcig pu mi 'gro ste || rgod[15] cing 'dug par mi bya'o ||[16] (13)
zhes gsungs so ||

1. P: padma
2. D: 'ji
3. D: 'dres
4. SP: gdol pa dang ni zol pa dang ||
5. P: pa
6. D: brten
7. D: dgod
8. D: neng
9. SP: dag
10. SP: rnam par spang
11.: SP: de la nam du 'ang dga' mi byed || mkhas dang rgod pa 'dri ba dang ||

12. D: spang
13. SP: bo
14. P, SP: pa
15. D: dgod
16 P: omits ||

I) T. 1636 *Dacheng jipusaxue-lun* 大乘集菩薩學論 (XXXII) 84c 12-23:
妙法蓮華經亦作是説。
應入行處。及親近處。常離國王。及國王子。
大臣官長。兇險戲者。及旃陀羅。外道梵志。
亦普親近。增上慢人。貪著小乘。三藏學者。
破戒比丘。名字羅漢。及比丘尼。好戲笑者。
諸優婆夷。皆勿親近。
若是人等。以好心來。到菩薩所。爲聞佛道。
菩薩則以。無所畏心。不懷希望。而爲説法。
寡女處女。及諸不男。皆勿親近。以爲親厚。
及至
販肉自活。衒賣女色。如是之人。皆勿親近。
兇險相撲。種種嬉戲。諸婬女等。盡勿親近。
莫濁屏處。爲女説法。若説法時。無得戲笑。

I) T. 262 *Miaofa lianhua-jing* 妙法蓮華經 (IX) 37b20-c7:
應入行處。及親近處。常離國王。及國王子。
大臣官長。兇險戲者。及旃陀羅。外道梵志。
亦不親近。增上慢人。貪著小乘。三藏學者。
破戒比丘。名字羅漢。及比丘尼。好戲笑者。
深著五欲。求現滅度。諸優婆夷。皆勿親近。
若是人等。以好心來。到菩薩所。爲聞佛道。
菩薩則以。無所畏心。不懷悕望。而爲説法。
寡女處女。及諸不男。皆勿親近。以爲親厚。
亦莫親近。屠兒魁膾。畋獵漁捕。爲利殺害。

販肉自活。衒賣女色。如是之人。皆勿親近。
兇險相撲。種種嬉戲。諸婬女等。盡勿親近。
莫獨屏處。爲女説法。若説法時。無得戲笑。

II) Bendall (1897-1902): 92.6-94.13 = MS 51b2-52a2 = KN 50.9-12 = verses II. 81-82; 51.3-7 = II.86.88a; 52.1-12 = II. 92-97:
yasya tu niyatam eva bodhiprāpticihnam asti **ta**tra sutarāmavam anyanā rakṣitavyā |
yathoktam āryas*addharmmapuṇḍarīkasūtre*
iṣṭāmayān mṛttikasañcitān vā prītāḥ prakurvvanti jināṇ stūpāṇ |
uddiśya ye pāṁśukarāśayo pi 'aṭavīṣu[1] durgeṣu ca kārayanti || (81)
siktāmayā vā puna kūṭa kṛtvā ye kecid uddiśya jināṇ stūpāṇ |
kumārakāḥ krīḍiṣu tatra tatra ' te cāpi bodhāya abhūṣi lābhinaḥ || (82)
yāvaṭ ||
ye citrabhittīṣu karonti vigrahaṁ paripūrnṇagātrāṇ **śa**tapuṇyalakṣaṇāṇ ||
likhet svayañ cāpi likhāpayed vā ' te sarvvi bodhāya abhūṣi lābhinaḥ || (86)
ye cāpi kecit tarhi śikṣamāṇāḥ krīḍāratiñ cāpi vinodayanti |
nakhena kāṣṭhena kṛtāsi vigrahāṇ | (87abc)
bhittīṣu puruṣātha kumārakā vā || (88a)
sarvve ca te bodhi abhūṣi lābhinaḥ | (87d)
pe |
vādāpitā jhallaripo pi ye hī ' jalamaṇḍakā vāpy atha maṇḍakā vā |
sugatānam uddiśyatha pūjanārthaṁ gītañ ca gītaṁ madhuraṁ ma**no**jñamṇ || (92)
sarvve ca buddhā abhūṣi loke ' kṛtvā (c)a tāṁ bahuvidharatnapūjāṁ |
kim alpakampī sugatāna dhātuṣu ' ekam pi vādāyiya[2] vādyabhāṇḍamṇ || (93)
puṣpeṇa caikena hi pūjayitivā ' anupūrvva drakṣyanti hi buddhakoṭyaḥ | (94ab)
yaiś ca[52a]**ñja**lis tatra kṛtapi stū(p)e ' paripūrnṇa ekātalaśaktikā vā |
onāmitaṁ śīrṣa bhaven muhūrttaṁ avanāmitaṁ kāya tathaikavāraṁ | (95)
namo stu buddhāya kṛtaikavācā ' ye hī tadā dhātudhareṣu teṣu |
vikṣiptacittair api yaikavācā **te** sarvvi prāptā imam agrabodhiṁ | (96)
sugatāna teṣāṁ tada tasmi kāle ' parinirvṛtānām atha tiṣṭhatām vā |
ye dharmanāmāpi śṛṇūṣu satvās | te[3] sarvvi bodhāya abhūṣi lābhina (97)

iti ||

1. ṣu added in top margin
2. written vā ' dā ' yi ' ya '
3. written satvā | ste

II) Derge Tanjur 3939, *dbu ma*, *khi* 56b5-57a6; Peking Tanjur 5336, *dbu ma*, *ki* 67b5-68a-7:

gang la nges par byang chub 'thob pa'i mtshan ma yod pa de la brnyas pa shin tu bsrung bar bya ste | *dam pa'i chos pad ma*[1] *dkar po'i mdo* las |

sa dang so phag las ni brtsigs pa yi || rgyal ba'i mchod rten dga' bzhin[2] byas pa dang ||

de phyir sa rdul phung po dag las kyang || mya ngan[3] dgon pa dag[4] tu byas pa dang || (81)

byis pas[5] rtsed mor de dang de dag tu || gang gis[6] rgyal ba de phyir mchod rten dag | bye ma las ni phung por byas pa yang || de rnams kyis kyang byang chub thob par'gyur || [7] (82)

zhes bya ba nas | [8]

gang gis rtsig ngos gzugs kyi ri mo dag | bsod nams brgya mtshan yongs su rdzogs pa'i sku ||

bdag gis bris sam 'dri ru bcug kyang rung || de dag thams cad byang chub thob par 'gyur || (86)

skyes bu dag gam[9] on te gzhon nu'ang rung || gang dag la la de ni slob pa'i tshe || rtsed mo dga' dang bsang[10] ba byed pa na || rtsig ngos sen mo shing bus gzugs bris pa || (87)

de dag thams cad byang chub thob par 'gyur || [11] (88a)

zhes bya ba'i bar du'o || de bzhin du sbyar te || [12]

bde bar gshegs pa rnams la mchod pa'i phyir || gang dag lcags kyi sil khrol brdung[13] bcug dang ||

chu la brdabs dang thal mos[14] brdabs pa dang || yid du 'ong zhing snyan pa'i glu dbyangs[15] dang || (92)

ring bsrel de dag rnam mang mchod byas pa || de dag thams cad 'jig rten sangs rgyas

'gyur ||

bde gshegs ring bsrel la ni chung[16] zad dang || [17] sil snyan gcig brdungs pa yi sgra phyung ngam || (93)

me[18] tog gcig tsam gyis ni mchod pa dang || bde gshegs gzugs dang rtsig ngos bris pa la ||

'khrug bzhin pa yi sems kyis mchod na[19] yang || de dag rim gyis sangs rgyas bye ba mthong || (94)

mchod rten de[20] la gang gis thal mo sbyar || yongs su tshangs pa'am thal mo ya gcig gam ||

yang na mgo bo skad cig btud pa dang || de bzhin lan cig lus kyang btud pa dang || (95)

gang gis[21] ring bsrel gnas pa de dag la || g-yeng[22] ba'i sems kyis phyag 'tshal sangs rgyas zhes ||

tshig gcig lan 'ga' brjod par byas pa yang || de dag kun gyis[23] byang chub mchog 'di thob || (96)

de tshe bde bar gshegs pa de dag ni || mya ngan 'das sam yang na bzhugs kyang rung ||

sems can gang gis chos 'di'i[24] ming thos pa || de dag thams cad byang chub thob par gyur || [25] (97)

zhes ji skad gsungs pa bzhin no ||

1. P: padma
2. SP: zhing
3. SP's P: ngan; NDCL: ngam
4. SP's D: dag; others gang
5. SP: pa
6. P: gi
7. P: omits ||
8. P: omits |
9. D: rgan nam
10. SP: gsang

11. P: omits | |
12. P: |
13. SP: rdung
14. SP: mo
15. SP: blangs
16. P, SP: cung
17. P: |
18. P: mi
19. P: pa
20. SP: dag
21. P: gi
22. SP: g-yengs
23. P: gyi
24. P, SP: 'di
25. P: omits | |

II) T. 1636 (XXXII) 94a12-b1:

論曰。菩薩於諸補特伽羅。何有少分不作化度不護身者。見有如是。幖相決定得菩提故。於彼佛子不應陵蔑。應當守護。如妙法蓮華經云。

或有起石廟。旃壇及沈水。木槿并餘材。塼瓦泥土等。
若於曠野中。積土成佛廟。乃至童子戲。聚沙爲佛塔。
如是諸人等。皆已成佛道。

乃至

彩畫作佛像。百福莊嚴相。自作若使人。皆已成佛道
乃至童子戲。若草木及筆。或以指爪甲。而畫作佛像。
如是諸人等。皆已成佛道。若人於塔廟。寶像及畫像。
以華香幡蓋。敬心而供養。若使人作樂。擊鼓吹角貝。
簫笛琴箜篌。琵琶鐃銅鈸。如是衆妙音。盡持以供養。
或以歡喜心。歌唄頌佛德。乃至一小音。皆已成佛道。
若人散亂心。乃至以一華。供養於畫像。漸見無數佛。
或有人禮拜。或復但合掌。乃至擧一手。或復小低頭。

以此供養像。漸見無量佛。

又云。

若人散亂心。入於塔廟中。一稱南無佛。皆已成佛道。
於諸過去佛。在世或滅後。若有聞是法。皆已成佛道。

II) T. 262 (IX) 8c21-9a27:

或有起石廟。栴檀及沈水。木槿并餘材。塼瓦泥土等。
若於曠野中。積土成佛廟。乃至童子戲。聚沙爲佛塔。
如是諸人等。皆已成佛道。若人爲佛故。建立諸形像。
刻彫成衆相。皆已成佛道。或以七寶成。鍮石赤白銅。
白鑞及鉛錫。鐵木及與泥。或以膠漆布。嚴飾作佛像。
如是諸人等。皆已成佛道。彩畫作佛像。百福莊嚴相。
自作若使人。皆已成佛道。乃至童子戲。若草木及筆。
或以指爪甲。而畫作佛像。如是諸人等。漸漸積功德。
具足大悲心。皆已成佛道。但化諸菩薩。度脫無量衆。
若人於塔廟。寶像及畫像。以華香幡蓋。敬心而供養。
若使人作樂。擊鼓吹角貝。簫笛琴箜篌。琵琶鐃銅鈸。
如是衆妙音。盡持以供養。或以歡喜心。歌唄頌佛德。
乃至一小音。皆已成佛道。若人散亂心。乃至以一華。
供養於畫像。漸見無數佛。或有人禮拜。或復但合掌。
乃至擧一手。或復小低頭。以此供養像。漸見無量佛。
自成無上道。廣度無數衆。入無餘涅槃。如薪盡火滅。
若人散亂心。入於塔廟中。一稱南無佛。皆已成佛道。
於諸過去佛。在世或滅度。若有聞是法。皆已成佛道。

III) Bendall (1897-1920): 352.7-354.3 = MS 160b6-161b2 = KN 282.5-6; 283.6-13; 284.3-10 = XIII. 24, 26-29, 32-35; 286.3-4:

kathan dharmmadānaṁ dātavyaṁ ṇ | yathāryas*addharmmapuṇḍarīke* bhihitaṁ ṇ | |
kālena (c)o cintayamā[161a]**nu** paṇḍitaḥ ' praviśya layanan tatha ghaṭṭayitvā |
vipaśya dharmmaṁ imi sarvva yoniśo ' utthāya deśeta alīnacittaḥ | (24)
sukhasthito bhoti sadā vicakṣaṇo ' sukhaṁ niṣaṇṇas tatha dharmma bhāsate |
(u)dāraprajñapta karitva āsanaṁ ' caukṣe monojñe pṛthivīpradeśe ' (26)

caukṣañ ca so cīvara prāvaritā[1] ' suraktaraṅgañ ca prasannaraṅgair | [2]
asevakaṃ kṛṣṇa **tathā** daditvā | mahāprāmāṇañ ca nivāsayitvā | (27)
sapādapīṭhasmi niṣadya āsane | vicitraduṣyehi susaṁstṛte 'smiṇ |
sudhautapādaś ca upāruhitvā | snigdhena śīrṣeṇa mukhena cāpi | (28)
dharmmāsane tatra niṣīdiyānaḥ | ekāgrasatveṣu saman vipaśyaṇ |
upasaṁharec citrakathāṁ bahūṁś ca || bhikṣūnatho bhikṣuṇkās tathaiva | (29)
kilāsitāṁś cāpi vivarjayīta || **na** cāpi utpādayi khedasaṁjñāṁ
aratiñ ca sarvvāṁ visaheta paṇḍitaḥ | maitrībalaṁ parṣadi bhāvayec ca ' (32)
bhāṣec ca rātrindivam agradharmmāṇ | dṛṣtāntakoṭīniyutaiḥ sa paṇḍitaḥ
saṁharṣayet[3] tāñ ca tathaiva toṣayeṭ | na cāpi kiñcit tanu jān sa[4] prārthayeṭ ' (33)
khādyañ ca bhojyañ ca tathānnapānaṁ | vastrāṇi śayyāsanacīvarāṇi ' [5]
gilānabhaiṣajya na intayet saḥ | na vijñape[161b]**t parṣadi** kiñcid anyad[6] (34)
anyatra cinteya sadā vicakśaṇaḥ | bhaveya buddho ham ime ca satvā
etac ca me sarvvasukhaupadhānaṁ | yaṁ dharmma śrāveni ' hitāya loke || (35)
atraivāha ||
na ca kasyad antaśo dharmmaprimṇā**py** adhikataram anugrahaṁ karoti ||

1. Here MS adds erroneously: mahāpramāṇañ ca nivāsayitvā |
2. written °ai | rā°
3. rṣa added below line
4. ma?
5. Marginal note at bottom of leaf: āsanopari vastraṁ
6. d anya added in top margin

III) Derge Tanjur 3939, *dbu ma, khi* 190a3-b3; Peking Tanjur 5336, *dbu ma, ki* 220a4-b6:

chos kyi sbyin pa ji ltar sbyin par bya zhe na | *'phags pa dam pa'i chos padma dkar po i mdo* las gsungs pa |

mkhas pa dus su sems par byed pa na || khang bur zhugs te de bzhin sgo bcad nas ||
chos'di thams cad la ni tshul bzhin blta || langs nas zhum pa med pa'i sems kyis shod || (24)

mkhas pa bde la rtag tu gnas par 'gyur || dbe[1] la 'dug nas de bzhin chos kyang ston ||
gtsang zhing yid du 'ong ba'i sa phyogs su || yangs[2] pa'i stan[3] ni rab tu bshams bting ste || (26)
bzang po'i tshon gyis legs par kha bsgyur[4] ba || chos gos gtsang ma de ni rab bgos nas ||
rdul gzan[5] nag po de bzhin bshams byas la || sham thabs che[6] tshad legs par rab bgos nas || (27)
bcos bu'i ras rnams sna tshogs legs bting ba || rkang rten bcas pa'i khri la rab 'dug cing |
rkang pa legs par bkrus te steng 'dzegs nas || gdong[7] dang bzhin gyi mdangs ni rab snum zhing || (28)
chos kyi stan de la ni rab 'dug nas || sems can lhags[8] pa rtse gcig gyur rnams la ||
gtam mang sna tshogs mang po smra ba dang[9] || dge slong dag dang dge slong ma rnams dang || (29)
dge bsnyen rnams dang dge bsnyen ma dag dang || rgyal po dag dang rgyal bu rnams la yang ||
mkhas de[10] rtag tu phrag dog med par ni || sna tshogs don ldan snyan pa'i gtam yang ston || (30)**
le lo dag kyang rnam par rab spangs nas || skyo ba yi ni 'du shes bskyed mi bya[11] ||
mkhas pas mi dga' thams cad rnam par spang || byams pa'i stobs ni 'khor la bsgom par bya || (32)
nyin mtshan du yang chos mchog rab tu bsgom[12] || mkhas pa de[13] ni bye ba khrag khrig dpes ||
'khor rnams mgu zhing de bzhin dga' bar byed || de la nam yang 'dod pa chung[14] zad med || (33)
zas dang skom dang bza' dang bca' ba dang || gos dang mal cha chos gos rnams dang ni ||
na ba'i gsos sman dag kyang mi bsam ste || 'khor rnams la ni ci yang mi bslang ngo || (34)
gzhan du mkhas pa rtag tu bdag nyid dang || sems can 'di dag sangs rgyas 'grub[15] par

shog |
phan phyir 'jig rten chos gang bstan pa de || bdag gi bde ba'i yo byad kun snyam sems || [16] (35)
zhes bya'o ||
yang de nyid las | chos kyi rnam grangs 'di rab tu ston[17] pa na | [18] chos kyi dga' ba snyoms pa[19] byed de | [20] tha na 'ga' tsam la yang chos kyi dga' bas lhag par phan 'dogs par mi byed do zhes gsumgs so ||

** Note that this entire verse is not found in the Sanskrit text, or Chinese translation!

1. SP: de
2. P: yang
3. P: bstan
4. P: hard to read, but kha sgyur?
5. SP: zan
6. P: tshe
7. SP: mgo
8. P: lhag
9. SP: gtam mang rnam pa sna tshogs nye bar ston
10. P: te
11. SP: skyo ba snyam pa'i 'du shes bskyed mi bya
12. P: sgom
13. SP: des
14. SP: cung
15. P: grub
16. P: omits ||
17. SP: bstan
18. SP's D: | ; P: ||
19. SP: par
20. D: omits |

III) T. 1636 (XXXII) 142c6-20:

如妙法蓮華經偈云

菩薩有時。入於靜室。以正憶念。隨義觀法。
菩薩常樂。安隱説法。於清淨地。而施床座。
以油塗身。澡浴塵穢。著新淨衣。内外俱淨。
安處法座。隨問爲説。若有比丘。及比丘尼。
除懶墮意。及懈怠想。離諸憂惱。慈心説法。
晝夜常説。無上道教。以諸因緣。無量譬喩。
開示衆生。咸令歡喜。
衣服臥具。飲食醫藥。而於其中。無所希望。
但一心念。説法因緣。願成佛道。令衆亦爾。
是則大利。安樂供養。
是經復説。以順法故不多不少。

III) T. 262 (IX) 37c22-38a24:

菩薩有時。入於靜室。以正憶念。隨義觀法。
從禪定起。爲諸國王。王子臣民。婆羅門等。
開化演暢。説斯經典。其心安隱。無有怯弱。
…
菩薩常樂。安隱説法。於清淨地。而施床座。
以油塗身。澡浴塵穢。著新淨衣。内外俱淨。
安處法座。隨問爲説。
若有比丘。及比丘尼。諸優婆塞。及優婆夷。
國王王子。群臣士民。以微妙義。和顔爲説。
若有難問。隨義而答。因緣譬喩。敷演分別。
以是方便。皆使發心。漸漸增益。入於佛道。
除嬾惰意。及懈怠想。離諸憂惱。慈心説法。
晝夜常説。無上道教。以諸因緣。無量譬喩。
開示衆生。咸令歡喜。
衣服臥具。飲食醫藥。而於其中。無所悕望。
但一心念。説法因緣。願成佛道。令衆亦爾。
是則大利。安樂供養。

38b13:

以順法故不多不少。

＊この論文は、2000年８月にモントリオールで開かれた、第36回国際アジア・北アフリカ研究会議に設けられた、「『法華経』――過去・現在・未来」のパネルにおいて行った発表を基本とするもので、学会での発表に際して割愛した資料などを付け加えて再構成している。上記パネルへの参加は東洋哲学研究所の招待によるものであり、この場を借りて、研究発表の機会を与えて下さった同研究所および川田洋一所長に深く謝意を申し述べさせていただきたい。残念ながら、時間的制約や紙数制限のために、本稿においても細部にわたっては十分な論述を行うことがかなわなかった。いずれ改めて、関連するすべての資料を網羅した総合的な研究を公にする予定である。なお、この論文を執筆するにあたっては、望月海慧氏の先行研究を参考にさせてもらった。彼の優れた業績なしには、本稿で取りあげた『法華経』に対する視点も、おそらくは得られなかったと思われる。望月海慧、「中観派文献にみられる『法華経』の受容」、田賀竜彦編、『法華経の受容と展開』（法華経研究XII、京都:平楽寺書店、1993年）、pp.539-569

また、現在私は、オスロ大学のイェンス・ブロールヴィック氏とともに、チベット訳と漢訳および引用文献の比定とを含んだ、『シクシャー・サムッチャヤ』サンスクリットテキストの再校訂を準備中であり、本稿はその共同研究の最初の成果であることも付け加えておく。

注記

（1） ここでは、かなり後期のネパール写本を扱わないことにする。

（2） T. 1519（菩提流支）と『妙法蓮華經論優波提舎』T. 1520（勒那摩提）。14世紀チベットの Bu ston の仏教史 *Chos 'byung* にこの注釈書であろうと思われるものの名前だけが見られる。西岡祖秀、「『プトゥン仏教史』目録部索引」、『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』５（1981）:43-94: #667: *pad ma dkar po'i 'grel pa dbying gnyen gyis mdzad pa.* 又は #664: *pad ma dkar po'i don bsdus pa 100 śloka.* ただし、これ（ら）は漢訳からの重訳であった可能性もある。

（3） 僧詳の『法華傳記』T. 2068 (LI) 52c25-53a-2.

（4） Corrado Pensa, *L'Abhisamayālaṁkārav̥rtti di Ārya-Vimuktisena. Primo Abhisamaya. Testo e note critiche.* Serie Orientale Roma 37 (Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1967): 35.6-9.

（5） Unral Wogihara, *Abhisamayālaṁkārāloka Prajñāpāramitāvyākhyā.* Tōyō Bunko Publications Series D, 2 (Tokyo: The Tōyō Bunko, 1932-1935. 再版：東京：山喜房佛書林、1973）: 52.21-53.2; 133.23-134.1.

（6） Bhikkhu Pāsādika, *Nāgārjuna's Sūtrasamuccaya: A Critical Edition of the Mdo kun las btus pa.* Fontes Tibetici Havnienses 2 (Copenhagen: Akademisk Forlag, 1989): 126.1-24.

（7） Derge Tanjur 3856, *dbu ma, dza* 173b5-6.

（8） Derge Tanjur 3887, *dbu ma, sa* 146b6, 238b7, 239a1-2.

（9） Derge Tanjur 4029, *sems tsam, bi* 108b1-4.

（10） T. 1634 (XXXII) 45c24-26.

（11） 清田寂雲、「Çikṣāsamuccaya における法華経の引用」、『印度学仏教学研究』19/1 (1970): 217-220. 清田は KN 282.9-283.4 の長行を参考している。p. 219 によると、この文章は南条が利用した６本のネパール写本には存在せず、ケルンが中央アジア出土写本に基づいて挿入したらしい。しかし、戸田宏文からの情報によると、６本の中の５本（１本のWは未見）にはこの文章が含まれているとのことである。今はこれ以上詳しく調べる手段がないため、別の機会に改めてこの点を検討したい。本稿の末尾に付加した戸田宏文覚書参照。

（12） Cecil Bendall, *Çikshāsamuccaya: A Compendium of Buddhistic Teaching Compiled by Çāntideva, Chiefly from Earlier Mahāyāna-sūtras.* Bibliotheca Buddhica 1 (St. Pétersbourg: Imperial Academy, 1897-1920. Reprint: Osnabrück, Biblio Verlag, 1970).

（13） 中村瑞隆、「チベット訳法華経」、『法華文化研究』２（1979-）等。

（14） 戸田宏文、「Saddharmapuṇḍarīkasūtra: Romanized Text.」、『徳島大学総合科学部研究報告書』７（2000）:1-49, 特に 27-38.

（15） Derge Tanjur 3961, *dbu ma, gi* 102a1-b3. XIII.1-18ab を引用。

（ジョナサン・A・シルク／イエール大学準教授）

戸田宏文覚書

この長行（KN 282.9-283.4）に関しては、二つの可能性が考えられる。(1) ヘンドリク・ケルンがこの長行部分を作成した。(2) 南条文雄が、KN刊本の最初の手書き原稿を完成させた後、新たにこの長行を作成した。南条と泉芳璟は、法華経の日本語訳（1913年刊）を行なうに際して、長行部分の入っていない最初に作成したこの原稿を底本とし、また河口将来梵本（K）を参照した。

（1）ケルンの“作文”？

ケルンが編集し追加したとすれば、彼はKN刊本の校正の最後の段階で、どの写本を所持していたのかという疑問が生じる。ケルンが O（ペトロフスキー本）と Ca（ケンブリッジ Add. 1683）[1] を所持していたことは明らかである。（Add. 1683 を英訳（1884年刊）

に際して使用した。）

しかしながら、以下の2を除く語句は、Oは言うに及ばず、Caには出てこない。

1. (282.10)　paścimāyāṃ pañcāśatyāṃ = A (Royal Asiatic Society)
2. (282.11)　bhāṣate = A, Ca, B (British Library); bhāṣati = Cb (note12))
3. (282.13)　niścārayati = B, A
4. (282.13-283.1)　nāma gṛhītvā 'varṇaṃ bhāṣate na câvarṇaṃ cārayati = B

南条はこの長行部分を飛ばして最初の手書き原稿を作成したと推定される。この原稿を底本とした日本語訳には、この長行部分が欠けている[2]。これらの事実は、ケルンが長行部分を補ったとする推定を裏付けている。

ケルンがCa (Add. 1683)を持っていたことは、彼が英訳を行なう際にAdd. 1682とともに、Caを使用したので確認できる。しかし、彼がA, BおよびCb (Add. 1684)を持っていたかどうかは確認できない。だが、ケルンがこれらの3本の写本を所持していたと想定しなければ、上に挙げた3カ所 (1, 3, 4) の読みがKN刊本に採用され、また注にCbの読み (2) が記載された理由が分からなくなる。

仮定の話として、ケルンがO, Cbおよびその他の写本（複数）を使って長行部分を“作文”したと想定することも可能である。A, BおよびCbはイギリス国内で所蔵されているからである。しかし、最終的に筆者はこの可能性は非常に低いとみている。

Oとの校合

KN刊本のテキストとOのテキストは、完全には一致しない。ゆえに長行部分は、Oによっているのではない。いくつかのネパール系写本が使用されたのである。

（2）南条が後で追加した？——法華経写本の手書き原稿作成とKN刊本の出版

校訂テキストの原稿を作成するために南条が法華経写本の筆写作業を始めたのが、1879年以後であり、1884年の帰国でその作業は終了した。1905年に高楠順次郎がケルンに書簡を送り、南条が作成した梵文法華経テキストの出版を提案した。南条は完成したテキストの全文を清書して、ケルンのもとに送った[3]。清書の段階か、あるいは帰国後の時期も含めた、最初の手書き原稿作成が完成した後の、いずれかの時点で、この長行部分が付加された可能性がある。

KN刊本は4分冊に分けて出版された。

fasc. I (1908), (i), pp. 1-96
fascs. II/III (1909), pp. 97-192 / 193-288
fasc. IV (1910), pp. 289-384
fasc. V (1912), pp. 385-508, pp. I-XII, 1 pl.[4]

（3）南条、泉による日本語訳の年代

南条、泉による日本語訳の経過は以下のとおりである。

1903（明治36）年2月	南条、翻訳を雑誌『無盡燈』に掲載開始
1903（明治36）年5月	河口慧海帰国、梵語仏典将来（Kを含む）
1907（明治40）年10月	南条、自身作成の梵文手書き原稿を泉に手渡す。以後、泉が翻訳作業を引き継ぐ。(p. 248, line 6から後は泉訳である。)
1912（大正元）年8月	泉、翻訳完了
1913（大正2）年9月10日	泉の序文の日付
1913年9月25日	発行日

泉訳はすべて南条の手書き原稿とケルンの英訳を見ての翻訳である。

（4）最も確実性の高い推定

筆者の印象、および最も確実性の高い推定として、南条が清書を行なった段階で最初の手書き原稿に欠けていた長行部分を急いで作成したということであろう。この長行部分には注が3つしかなかった。P. 282, 12); p. 283, 1), 2)[5]を参照のこと。ケルンがOを参照してその他の注を加えたのである。こう考えれば、この部分に注が少ない理由が無理なく説明できる。筆者の考えは、南条が長行部分を作成したという方向に傾きつつある。なお、この長行部分は、五写本すなわち、A, K（東京大学図書館所蔵 no. 414), B, Ca, Cbにある。

同様のことがKN刊本431.12-432.4, 南条・泉訳p. 479.6-12にみられる。同訳pp. 479-480脚注参照。

注

1　KN刊本の略号表ではCa (Add. 1682), Cb (Add. 1683) となっているが、実際はCa (Add. 1683), Cb (Add. 1684) である。Akira Yuyama, *A Bibliography of the Sanskrit Texts of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra*, Canberra 1970, p. 12, note 9), p. 13, note 10).

2　南条文雄・泉芳璟共訳『梵漢対照新訳法華経』京都・平楽寺書店，大正2年(1913)，p. 316，脚注。

3　金倉圓照「インド学より見たる法華経」法華経研究III『法華経の成立と展開』京都・平楽寺書店、第2刷　1974年，p. 506.
KN刊本の南条の序文, p. II, lines 10-14参照。

4　Akira Yuyama, *Eugène Burnouf: The Background to His Research into the Lotus Sutra*, Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica, vol. 3, Tokyo 2000, p. 134.

5　P. 282, note 12) “ti Cb” and p. 283, note 1) “All but O”：ここにもっと詳しい異読があったはずである。ケルンがまとめてしまったのであろう。P. 283, note 2) “the rest”：ここにも、もっと詳しい異読があったはずであり、同じくケルンが縮めたのであろう。